

ある出会い

小野 基

人文社会科学研究所講師

もうずいぶん前のことになる。あれは1997年の8月のことだった。その月一杯で本学の助手を辞職して9月よりウィーンのオーストリア科学アカデミーの研究員職に就くために渡欧することが決まっていた私は、家財道具いっさいを整理するために、当時住んでいた春日の単身宿舎にほど近い松見公園で催されたフリーマーケットの一角に店を出した。真夏のことだったので電気ストーブはさすがに売れ残ったが、土鍋も売れたし、絨毯をはじめ、かなりの物品を処分することができた。その折に、色々なガラクタを一人でたくさん買って下さった上品な初老の紳士がいた。

彼は、趣味の絵の画材にするのだと言って、古いコーヒー・ミルや大きな臺の目隠しなどを引き取って下さった。売りものの一つだったオーストリアのウィーン美術史美術館のポスターに目をつけた彼は、私がそれを手に入れた由来を尋ねた。私は自分

がかつてウィーンに5年余り留学していたこと、今度再び古巣のウィーンに赴くことになり、フリーマーケットに出店した経緯を説明した。いきおい、自分が筑波大学でインド哲学、中でもインド中世の仏教思想史を研究している者であることを告白する羽目になったのであるが、老紳士はそのような古色蒼然とした私の専門にことのほか興味を示され、彼の名刺を私に下さった。

彼は筑波大学名誉教授で、当時市内の或る病院の脳神経外科長として活躍されていたM教授だった。当時、私は非常勤先で教えていた倫理学の講義の中で、主に生命倫理をとりあげて論じていたこともあって、90年代の脳死・臓器移植をめぐる議論の中で重要な役割を果たされたM教授の名前は仄聞していた。そのような教授から、一度インド哲学や仏教における死生観についてじっくり話を聞きたいので一緒にどこかで食事でもしましょう、と誘われた時には、

少々戸惑いながらも、少し晴れがましく、とても嬉しかったことを覚えている。

一週間ほどして電話がかかってくる、わたしたちは彼の弟子と思しき一人の若い医学生とともに、つくばでは老舗の吾妻のフランス料理屋で食事をし、ワイングラスを傾けながら、インド哲学や仏教における死後の世界の話や生命観のことやら、さらにターミナルケアの問題などを中心に談論風発の一夕を過ごした。教授は、高名な学者とも思えないフランクな話し振りだった。脳死問題では自然科学者としての立場を一貫して主張された教授だったと聞くが、その夜の教授は医学や自然科学の限界を率直に認め、哲学的な問いに関する教授の鋭い舌鋒に私はしばしば答えにつまり、自分の不勉強を羞じる羽目になった。

逆にこちらから脳死問題のことなどもお伺いしたのだが、教授はあまり多くを語らなかった。むしろ音楽や絵画の話などで盛り上がり、二次会に今はもう店を閉めてしまった天久保のジャズ・バーに繰り出し、随分たくさん酒を飲んだ。教授は何か遠くを見つめるような目をされながら、いろいろな話を聞かせて下さった。楽しい夜だった。それから2週間して、私はヴィーンへと出発した。

留学から帰国して以来の4年間に二度ほ

ど学会その他の所用で訪れてはいたが、久しぶりに住むヴィーンの町に私のところは浮き立った。9月初旬とはいえヨーロッパはすでに秋たけなわだった。新居のアパートは古いつくりの北向きの3階だったが、一人暮らしの私には充分過ぎる広さだった。到着した翌日、時差ぼけの目をこすりながら、まだひんやりした朝の空気の中を近くのパン屋に焼きたての「センメル」を買いに行くとき、またヴィーンの生活が始まることを実感したものである。

ヴィーンでの2年間はまたたく間に過ぎた。私はあの古都で、いつのまにか不惑の齢を迎えていた。帰国が間近になった1999年5月には、日本で二例目の脳死心臓移植が行われたことをインターネットで知った。そして6月の或る日、ヴィーン南駅の売店で久しぶりに日本の新聞を買って目を通していた私は、偶然にも、訃報欄にM教授の名前を見出すことになったのである。死因は肝不全とあった。私はその時はじめて、あの時教授がなぜ私のような若輩の文科系研究者と話をする気になられたのか、何を探し求めておられたのかが、少しだけだが分かったような気がした。

これはまったくの憶測に過ぎないが、私たちが出会ったあの1997年の夏に教授はすでに自らの死期を覚っておられたのではないかと思われてならない。そしていろい

ろなことを考えられていたのではなからうか。人の死とは何かというあまりにも難しい問題に対して一人の科学者としての立場からひとつの答えを出された教授だったが、御自身の死ということが、それとはまた全く別の問題だったであろうことは想像に難くない。私は無論、それを首尾一貫しないなどと言うつもりは毛頭ない。むしろ学者としての教授の奥深さと、人間存在というものの深遠さを垣間見た思いがするのである。

M教授とは偶然の出会いであり、お目にかかって話をしたのもたった2回きりであったが、思い出深い出会いであった。そしてそれは、つくばならでの出会いであったと言ってもよいだろう。

1999年7月から再びつくばで働くようになって以来、さまざまな業務の中で、私も本学の理工系や医学系など異分野の研究者と会議等で膝を交える機会がないわけではない。しかし彼らと世間話をしたり、お互いの専門について、ましてや趣味あるいは世界観についてじっくり語り合ったり、といった機会は全くない。私にとっては、趣味の合唱を通じて知り合った高エネルギー研究機構や宇宙開発事業団の研究者との友人関係や、あるいは年に一度、ドイツ文学・語学の教員院生諸氏の主催する「ドナウの会」での異分野の教員や学生との交流など

が、つくばでの異業種交流の数少ない機会となっている。

私は実のところ、身の回りのキャンパスを闊歩しておられる、私とは全く異なった学問の世界に生きておられる多くの方々ともっと親しくお話してみたいという深い欲求を持っている。それは何か具体的な研究成果や実利を求めてというのとは違って、自分には全く未知の世界について深い知識をもっている人々との純粹に知的で人間的な交わりに対する希求である。そのような学者間の異分野交流に、このつくばほど適した土地が果たして今の日本に他にあるだろうか、とも思う。かつて京都の一角には、そのような知的な交わりの風土があったということをごどこかで読んだ気がするが、昨今の京都は如何なのであろうか。

若いころであればとにかく、或る程度年齢を重ねてから新しい人間関係を構築するには相当なエネルギーを要するのも事実であろう。ましてや、われわれの日常はあまりに多忙すぎる。しかしながら、知の異業種間交流がもたらすかもしれない果実には、私は知を愛する哲学学徒の端くれとして、ひそやかに、つねに限りない憧れをもちつづけているのである。

(おの もとい／仏教学)